



平成27年 6月22日 NO・37

〒311-1114 水戸市塩崎町1016
 TEL029-269 -2116 FAX029-269 -3160
 Mail tunezumi-j@magokoro.ed.jp
 【ホームページで、カラー版が見られます】

様々な思いを記憶にとどめ市総体終了

【生徒諸君へ】

本で行われたソフトボール部の大会をもって、本年度の水戸市総体が終了した。この大会までには、多くの汗と同時に多くの喜びがあったことだろう。そして時には涙が流されたこともあったはずだ。何はともあれ、本日までの君たち一人一人の健闘を称えたい。

さて、「勝負はできれば勝った方がよい。」勝つ経験はその後のその人の人生に「自信」となって良い影響を与える。しかし、若いときの「負け」は、どう生かすかによって、「勝つこと」以上にその後の、その人の人間力の育ちのためになり得る場合もある。つまり、負けには二種類ある。「生きる負け」と、「単なる負け」だ。このような言葉がある。

「勝ちに不思議の勝ちあり、負けに不思議の負けなし」

【肥前平戸藩主 松浦静山のことば】で、野村克也監督が好んで使ったことで有名になった。

「勝ちの中には、どうして勝ってしまったのか、自分でも不思議に思うようなラッキーな勝ち方をする場合はある。だが負けるときには、必ず何らかの明確な理由があって負けている。負けに不思議な負けはない。」という教えだ。

負けに不思議の負けが無いのなら、負けたときに「なぜ自分は（自分たちは）負けたのか」分析し、次に生かして努力することが可能になる。一・二年生はよくよく今回の自分（自分たちのチーム）を分析し、次に臨む準備をしてくれることを期待する。

では三年生たちはどうだろうか。「そんなことを言っても、自分たちは三年生だから次はありません。」という生徒もいるかと思う。本当にそうだろうか。今回の勝ちや負けの経験は、部活だけで生きるとは限らないのだ。君たちの今後の人生の様々な場面で、今回のこの経験を生かさなければもったいない。ある部活のある生徒が負けの経験をした後に、次のような質問をしてみた。

「口惜しいか？」

『口惜しいです。』（悔しさを感じていることが次に伸びる大前提となる。）

「ところで、今日の負けの原因はどんなところにあったと分析している。」

『チームの団結力、話し合いが決定的に足りない。自分が思っている位置に仲間が動いてくれないという思いが残っている。当然、仲間も自分が仲間の思っている動きをしてくれないかと思っっていると思う。本当に今口惜しい。もう少し、皆にもっと話そうと声をかけておけば良かった。』

その生徒は、このように答えてくれた。次に生きるよい言葉だと思った。

さて、生徒諸君。君たちは友のこのような思いを聞いてどう思うだろうか。

負けに不思議の負けは無いのだ。負けを次に生かすことは、努力次第で必ずできる。必要なのは、「行動を起こす勇氣と、多少の困難に出合っても、何度でも何度でも起き上がり、向かっていく持続力（諦めの悪さ）」だ。

今回の総体の勝ち負けの経験が、今後の君たちの人生で、なお一層輝くことを祈念する。

学校長 飯島尚之



総体に備えて朝練をしている期間中、校長が校庭に降りると、まず気づくのはサッカー部だ。

「校長先生、おはようございます」全員が声を揃えて挨拶をしてくれる。

続いて、野球部。同じように「校長先生、おはようございます。」と挨拶がそろそろ。さらに、校庭を半周しソフトボール部と、挨拶が続く。これが朝の日課になっていた。

ある日の朝、サッカー部の練習中、いつもの朝のように校庭に降りて行った。

田山君がすかさず気づき、「挨拶」と部員に声をかける。グラウンドの2・3年生たちはすぐに気づき「挨拶」をする体制を整える。

その朝は、1年生たちが校庭隅の部室の前で練習していたので、田山君の指示が聞こえなかったようだ。「挨拶」の体制をとらず、部室前に座ったままだった。

その時、3年生の園部君が、「挨拶」の体制をすっと解き、「1年せーい、あいさつ」と遠くの1年生にも届く声で指示を出した。

指示に気づいた1年生たちが、すっと立ち上がり、2・3年生同様、挨拶の姿勢を整えた。

何気ない風景だが、このように2・3年生が自らきちっとした姿勢で行動し、それを後輩に指導していく。こうするから常中魂は代々次に伝わっていくのだろう。先輩が自ら範を示し（背中語り）、間違った行動を見逃さず声かけをする。1年生たちは自らの行動を振り返り、サッと行動を修正する。

この朝のサッカー部員たちの行動こそ、常中生にふさわしいと感じた。

背中で語る

園部 尚之



常中魂